

3・11後を生きる

汗と涙…県内外「協働」で

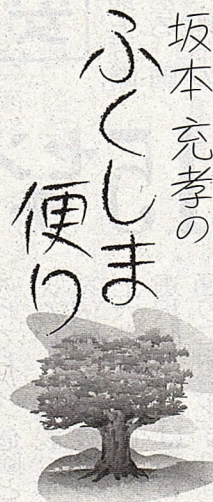
「ふくしま再生の会」報告会から

原発事故で五年半前に全村避難となった福島県飯館村。今月の村長選で現職の菅野典雄氏（ふく）が再選され、菅野村長が先導する来年三月の避難指示解除は現実味を帯びてきた。今後の課題は、一度は無人となり、汚染土の袋で覆われた村をいかに再生させるかだ。そんな折、震災の三月月後から村内で放射線量の計測、農地の復活などに取り組みてきたNPO法人「ふくしま再生の会」（田尾陽一理事長）の活動報告会があった。報告の一端を紹介しつつ、新しい村づくりの道筋を考えてみたい。



二十三日、東京大学農学部（東京都文京区）の講堂に約百二十人が集まっていた。このうち十五人は飯館村で農地の復活や除染、新しい産業づくりなどに取り組みてきた住民たち。福島県農林水産部の担当者。村の復興除染課長の姿もある。そんな福島県から来た人々を囲むのは、技術、知識、情報などを提供してきた学者、医師、ボランティアなど県外協力者たちだ。

「ふくしま再生の会」は二〇一一年六月、東大を中心とする学者グループが飯館村の農家、菅野宗夫さんらと出合って結成された。以後、週末ごとに村に入り、放射線量のモニタリング、ハウス栽培による農業再開の道の模索などを続けてきた。菅野さんは、こう話す。



坂本充孝の
ふくしま
便り
汚染土を詰めたフレコンバッグで覆われた飯館村の農地
昨年10月、福島県飯館村で



「暗いイメージになってしまった飯館村から明るいメッセージを発信する。そのためには村人だけの力では足りない。県外の人々の知恵や経験ももう一つ協働の考え方が大切」

また溝口勝・東大教授（農学）は「原発事故で科学技術に

東京新聞福島特別支局
電話 024(535) 2327
FAX 024(535) 2328

関する信用は失われた。今、知識を現場に返す時だと感じた」と活動参加への動機を話した。

そうして集まったメンバーのそれぞれの活動報告があった。牛飼いの農家の小林稔さんは、太陽光発電で電力を売る飯館電力の社長でもある。

「除染が進み、帰村が現実化するに従って、住民の間に新たな不安が広がった。帰って

道を求めるかだ。会社を立ちあげて二年。三年目で黒字にし、四年目で配当を目指している。電力と畜産の融合ができたらしい」

先祖伝来の屋敷林「居久根」は今、放射性物質がたまる場所になっている。居久根は子どもが生まれるとスギの苗を植え、大きく育った木は家の建て替えで利用するなど、村人の生活と

ともにあった。問題に取り組む菅野啓一さんは、重機を使って居久根の腐葉土をはぎとり、埋設処理する技術などを考案した。

「事故の後、一度だけ孫を家に連れて行った。雪が降ったので放射能も遮断されると思ったからだ。孫は居久根に積もった雪でソリ遊びをして大喜びだった。あの孫が故郷に帰れるようにしてやりたい」と話した。

村にある二十の行政区のうち、ただひとつ長泥地区だけは帰還困難区域に指定されており、避難指示解除のめどがない。

「長泥は消滅するかもしれない」と嘆く地区の区長、嶋原良友さんは、事故後五年間の記録を「もどれない故郷なごころ」という一冊の本にまとめた。刊行にあたって新潟県立大の山中知彦教授などが協力した。本は崩壊する地域社会の記録であり、同時に嶋原区長らの苦闘の記録でもある。「賠償金は東電が払っているという人がいるが、それは違う。もともとは先祖が残してくれた財産。先祖の思いを残したい」と嶋原さんは話す。



ほかにも村内で桜を育てている大学院生たちのグループ、仮設住宅で健康相談をしている医療チームなどからたくさんさんの報告があった。

原発事故で失われた人の営みを取り戻すために、どれほどの汗と涙が必要となるのか。報告会は語っているように思えた。

（福島特別支局長）